月、血、そして少女の変化し成長する身体
「月経」から読む George MacDonald 作品の女性像

隈部　歩

本発表は、George MacDonald (1824-1905)の“Little Daylight” (1871)と *The Princess and the Goblin* (1872)を取り上げて女性像に新たな光を当てる。女性の身体性において、男性が特に脅威を感じ嫌悪して来たものは「月経」であろう。世界各地の月経に関するタブーや穢れの概念は、女性を抑圧し社会生活から締め出すのに利用されて来た。キリスト教社会では月経は人間の堕落にイヴが果たした役割のために神が女に課した罰、言わば「イヴの呪い」だとされる。更に月経はヴィクトリア朝では女性の劣等性を表す医学的根拠とされた。しかし、月経は女性の身体性を最も明白に表す事象の一つである。したがって本発表は「月経」を強く意識させる「月」と「血」に焦点を当て、女性の身体性の問題に切り込む。女性像が男性との関係から論じられることが多いのと同様に、月経もまた、女性の身体を「生殖力」に限定するものとして異性愛的な見方がなされる。本発表は女性自身の身体や女性同士の関係といった女性中心的な視点で「月経」を捉え直し、少女の変化する身体や成長から女性像を再考察する。

第一部では“Little Daylight”の月の満ち欠けに相関して変化する Daylight 姫の身体を「月経」に着目して読み解く。魔女の呪いにより姫が月相に応じて生命と美に溢れる姿と、衰弱した老婆の姿に変化するのは、女性が月経によって言わば身体内部で生と死を繰り返すのを表面化したようだ。多くの社会で少女は初潮を迎えて穢れた身になると見做されるため、月経中の女性を隔離する月経小屋は否定的な月経観や女性観の典型だと言える。城を離れ、森の中の小屋で一人で過ごす姫の姿は、月経小屋に隔離された少女を思わせる。月経に関する別の風習としてシエラレオネのテムネ族の、月と連動した女性の身体に関する慣習がある。彼らは月を重視し、月経と月齢の同期を信じている。少女は成人の儀の間暫く隔離されるが、彼女達が性的な自由を許される時期や、儀式を終えて夫の許に戻される時期は、月と月経をリンクさせた暦に従ってスケジュールされる。前者は新月の前後、つまり月経の前後である妊娠可能性の低い時期で、後者は排卵の時期であり妊娠する可能性の高い満月の前である。月と連関した月経ある女性の身体が社会にとって重要な意味持つのは、テムネ族のような未開部族に限らない。不妊治療や避妊は女性の月経周期が鍵となり、もしその女性が月齢と合致する月経周期を持つならば、現代社会でも月と月経が大事な役割を果たすと言える。しかし、これらは月＝月経に従って変化する女性の身体を「生殖力」に限定して定義し、コントロールしていると言える。月の満ち欠けに従って変化する Daylight 姫の身体は、月と月経に支配された女性の身体を象徴するだろう。しかし彼女の場合は前述した月経タブーや慣習に見られるような、誰か（特に男性）に支配されるものではない。実は森の中の小屋は姫自身が自分専用に建てさせたものである上、簡素で劣悪な環境の月経小屋とは程遠く、美しい庭付きの居心地の良い場所だ。確かに姫は新月の時の老婆のような姿を見られないようにこの小屋に自主隔離しているが、むしろ彼女は月の下で踊り存分に月光を浴びたいからここで多くの時間を過ごしている。姫は決して穢れた存在として誰かに隔離された訳ではなく、自らの意志で隠れたり、楽しみを自由に味わったりするためにここで暮らしているのだ。Daylight 姫は月が満ちるにつれて生命力と美しさを増し、満月にそれらは頂点に達する。テムネ族の暦では、満月は最も妊娠可能性が高く、この時期に少女は成人の儀を終えて夫の許へ返される。彼らは女性の妊娠・出産の確率を上げるために月と連関した女性の身体の周期を使う。対照的に、月に合わせて変化する姫の身体は、誰でもない、彼女自身のものである。月光の下、喜びに満ちて一心に躍る姫に一瞬で魅了された王子は森で一晩中彼女を見詰めるようになるが、姫は木陰に隠れて覗き見するだけの彼の存在を全く知らない。美しさを増す時期に、彼女が自身の姿を誰かに見せるのを意図せずに、セクシュアリティー・美・生命力を溢れ出させて踊る姿は、身体が彼女自身のものだと示す。それは異性愛規範的な生殖力に制限されることはなく、彼女自身に喜びをもたらすものなのだ。

Daylight 姫の呪いは、王子が新月の夜の老婆のような彼女を見て死にかけていると思い、純粋な同情の念からキスをして解ける。そして曙光が射した時に姫は本来の若く美しい姿に戻り、その顔は暁の光、瞳は紺碧の空のようであった。彼女の美しい姿と青空のような瞳は何度も言及されており、美しさが頂点に達する満月の夜に金髪をなびかせて踊る姫を王子は「日光の化身」と表現していた。つまり呪いが解けた姿は月が満ちている時の彼女の姿のままなのだ。我々読者はその後の姫について知ることはできないが、彼女は夜に眠り昼に活動するようになると推測される。月を奪われたとまでは言わずとも、姫は昼に寝て夜中起きていたり、月の満ち欠けに応じて身体が変わったりすることは最早ない。しかし、彼女は日光を奪われていた時も、満月の夜は「日光の化身」と形容される名前通りの Daylight 姫であり、正に彼女の身体そのものが日光のようであった。呪いが解けて名実共に「日光姫」となった彼女は、今度は日の光の下、相関して目に見える形で生と死を繰り返していた月との関係を、身体の内部に統合すると考えられる。身体内部で生と死を繰り返すのは、月経に顕著な特徴だ。月経は「生殖力」に限定して女性の身体を定義すると考えられるが、月相に応じて変化する姫の身体を月経のメタファ

ーだと捉えると違った見方ができる。彼女から溢れ出す生命力や美、セクシュアリティーは、彼女自身に喜びをもたらしていた。更に彼女は月と身体の強烈な結び付きにより、生と死をはっきりと経験できた。それを身体内部に統合するであろう姫の姿に、月経ある身体は女性自身のものであり、生命力や、死と生へのより深い理解をもたらすという肯定的な月経観を見ることができるだろう。

第二部の *The Princess and the Goblin* の考察では、Irene 姫の身体性や彼女を教え導く大祖母との強固な疑似的な母娘関係を「月経」にフォーカスして明らかにする。大祖母は、月明りの中に座ると月光に溶け込むような銀白色の長い髪を持つ。対照的に Irene は母譲りの日光のような金髪であり、対になる特徴は彼女達の強い関係性を示す。また、大祖母の空を模した部屋にある、月を思わせる不思議なランプの光のお陰で、外で途方に暮れていた Irene は無事に大祖母の許へと導かれた。月は 2 人の特別な関係性を示すものなのである。

Irene が血を流す 2 つの場面に注目して「月経」に関する考察を深める。一度目は、彼女が骨董品のブローチの針で親指を怪我した時である。少女が針等の鋭いもので指を刺し血を流すエピソードは、Sleeping Beauty を思い起こさせる。これは初潮や性交による出血の象徴として、異性愛的観点で少女が大人の女性になる契機だと見做されるが、Irene 姫と Sleeping Beauty は対照的だ。糸車の針で指を刺した瞬間眠りに落ちて疑似的な死の状態のまま王子（男）の訪れを待たねばならない Sleeping Beauty に対し、Irene は針で指を刺した後、むしろ痛みで眠れずに大祖母（女）の許へ向かう。姫の怪我に気付いた大祖母は、薔薇のような香りの軟膏を彼女の手に優しく塗り込む。その後 Irene は大祖母と共に眠るが、王子のキスを必要とせずに翌朝自分のベッドで自ら目覚める。そして指の傷が完治していただけでなく、姫は生命力溢れ積極的に行動する少女へと成長を遂げる。次に、ゴブリン達に地下に幽閉された鉱夫の少年 Curdie を助け出す中で姫の手が血だらけになる場面を見てみたい。胎児が月経血によって作られると考える地域には、強い月経タブーと穢れの概念がある。この場合月経血の適切な役割は新しい生命の形成であり、月経は出産の失敗として捉えられるため、月経血は怪我をして流れる血と同様に、生命力の流出―死―を連想させる。これは初潮に怯える少女達の反応にも見ることができるだろう。しかし同時に、月経は生命を育むための準備であり生命力を表す。Curdie を救うために重たい石や岩をどかす過程で Irene が流した血も、死ではなく生命力を表す月経血のようである。大祖母は、Curdie を救い出した姫の血だらけの手や全身の打ち傷を治すために、不思議な銀の浴槽に彼女を入れる。Irene は頭まで水に浸かり、浴槽の中で目を開けると美しい青色しか見えないが、彼女は恐れるどころか、完璧な至福の状態を味わう。母親の胎内に戻ったような安心感と幸福感に包まれた Irene が聞いた大祖母の歌声は、お腹の中のわが子に歌い掛ける母親のもののようだ。大祖母に抱かれて浴槽から出た姫は生まれ変わったように感じ、全ての打撲傷と疲れは消え、血だらけの手も元通りになる。姫は傷を癒やされる過程で死と生を経験し、生命の神秘を自ら経験して知ったと言える。

大祖母が姫の血を流す手を二度癒したエピソードを「月経教育」という観点で読んでみたい。月経教育の適任者は古今東西問わず母親だとされる。ヴィクトリア朝でも同じだが、月経は母娘間で否定的な意味を以て継承された。当時女は教育よりも生殖機能が重視され、高等教育は正常な性的機能の成熟を阻害すると捉えられていたのだ。そして月経教育は男性医師が牛耳り、少女ではなく母への助言という形を取り、月経時は頭も体も安静が最重要とされ、母から娘に伝承される女性を家庭に閉じ込める教育が完成していた。一方で大祖母と Irene の間には男性の入り込む隙間はない。そして、姫の流す血を月経のメタファーだと考えると、大祖母は月経教育で重要な正しい経血の処置を施したと見做せる。更に、月経は女性を家庭に閉じ込める理由であったが、姫は血を流してそれを大祖母に癒やされる二度の経験ー或る意味月経教育を受けたエピソードーの後、少しずつ自立をして邸宅の外へ向かい自ら行動する力強い少女になる。当時月経は女性の劣等性の証明とされたが、姫の出血は劣等性ではなく、生命力や成長を明示する。また、月経は新たな生命を産み出す準備である上、女性は身体の内部で生と死を繰り返すことになる。言わば、月経教育とは生命の神秘を授けるものなのだ。更に、血を流す少女とそれを癒す大祖母の身体的に密接な関わりは、月経が構築する、男性を介さない強固な女性の関係性を表す。姫が経験した密な身体的な関わりや生命の神秘は、月経の根幹にあるものを示すだろう。

歴史を通して月経に関するタブーや穢れの概念が世界各地に見られ、月経は女性自身にとっても忌むべき・隠すべきものであり、ヴィクトリア朝に限らず現代でもまだタブー視される傾向がある。だが、月経を女の「潜在的な力」と肯定的に捉える Nancy Milford は“the very cyclical motion of her body makes her life marked by upheaval, change and discharge. … *change need not stun her or threaten her, for she is in constant flux*” (*The Curse* 95, emphasis added)と述べる。Milford の言う「変化」は老いや死だと考えられる。私は Milford の主張に、月光の下喜びに満ちて踊る Daylight 姫や、出血を大祖母に癒され成長する Irene 姫の姿を付け加えたい。つまり、月経は女性の生命力や、女性同士の連帯を生み出すものなのだ。「イヴの呪い」、いや「イヴの恵み」は、女性中心的な観点で女性像、特に身体性の問題を捉え直すことを可能にするのではないだろうか。

参考文献：Delaney, Janice, Mary Jane Lupton and Emily Toth. *The Curse: A Cultural History of Menstruation*. U of Illinois P, 1976.